

# 「今も見るごと」論

大野 晋

万葉集卷一の卷末に

秋去らば いまもみるごと 今毛見如 妻恋ひに 鹿鳴かむ 山そ

高野原のうへ (巻一・八四)

という歌がある。ここに「今も見るごと」とあるのは現代語にそのまま訳して「今も見るように」として一応の理解ができる。そこで、この歌の問題はむしろ、秋の実景を見ての作か、それとも屏風絵を見ての作かというような点にあると考えられている。

しかし、万葉集中「今も見るごと」は成句として次のように使われていて、その句を含む歌には、一つの共通

した発想がある。

(1) 常世物 この橘の いや照りに 吾ご大君は

いまもみるごと 伊麻毛見流其登 (万葉・四〇六三)

(2) はしきよし 今日あむの主人は 磯松の 常にいま

いまもみるごと さね 伊麻母美流其等 (万葉・四四九八)

(3) ……た 這ふた 鶯の 行きは別れず あり通ひ いや

このは 毎年に 思ふどち かくし遊ばむ 異麻母見流

こと  
其等

(万葉・三九二)

(4) 遠妻の ここにあらねば 玉梓の 道をた遠み

思ふそら 安けなくに 嘆くそら 安からぬも

のを み空ゆく 雲にもがも 高飛ぶ 鳥にも

がも 明日行きて 妹に言問ひ わが為に 妹

も事なく 妹がため われも事なく 今いま見み如ごと

副たひてもがも

(万葉・五三四)

この四例がすべてであるが、「今も見るごと」は単に「今も見るように」ということではないようだ。というのは、各々の歌の趣旨が、次に見るようにすべて祈願をこめたものだからである。

(1) 橘の実のいよいよ輝くに似て、わが大君はいよいよお菜え下さい。

(2) 今日の主人は岩辺の松のように、いつまでも変わらずにおいで下さい。

(3) 毎年毎年仲よしたちはこのようにいよいよ盛んに宴遊をしましょう。

(4) 私のために妻は無事で、妻のために私も無事で一緒にそろっていられますように。

つまり、「今も見るごと」とは「変わりなく」ということで、昔の言葉でいえば「幸(さき)く」とでもあるはずのことである。奈良時代のサキクとは「幸福で」ということであるが、それはむしろ「無事で、息災で」ということである。「今も見るごと」もまたそうした「いつまでも幸(さき)くあること」を祈願する表現と見るべきもののごとくである。してみると、

秋去らば 今も見るごと 妻恋ひに 鹿鳴かむ山そ

高野原のうへ

とあるのは「秋になったなら、変わることなくこの高野の原のほとり(佐紀の山)は(毎年毎年、永久に)妻恋いのために鹿が鳴くことであろう山である。」ということ

とになる。

これは一種の賀の歌である。この佐紀の山は鹿が毎年妻恋い、結婚のために鳴き立てる場となるに相違ないという祝賀の歌である。この歌は実景の歌か、屏風絵を見ての歌か、その他種々の見解があるのだが、いずれも、「今も見るごと」が祈願をこめた表現だという点にふれていない。そこから多くの議論が生じたのである。

巻末のこの歌は、巻一の巻頭に、雄略天皇の新春の賀を置いてあることに對する、秋の賀の歌である。賀の歌をもって一卷を結ぶことは、当時の編纂意識としては至極普通のことである。

この歌には次の題詞がある。

長皇子、与志貴皇子一宴於佐紀宮一歌

長皇子御歌

ところが、元暦本・紀州本・伝冷泉為頼本の目録には、「長皇子御歌」の次に「志貴皇子御歌」の一行がある。これにもとづいて、万葉集には、本来最後に志貴皇子の御歌一首があったのに消失したのだろうという意見もある。(例えば伊藤博、「万葉集全注(一)」「など」)

万葉集の目録が全体として、いついかにして作られた

かについては、むつかしい問題がいろいろあり、今の場合もいろいろに考えられる。

しかし、この場合、本文の題詞に長皇子と志貴皇子とが佐紀の宮で宴をしたとあるので、長皇子の歌の他に志貴皇子の歌もあるはずと目録の作者が認めたという事情があるのではなからうか。